幸せ者の大馬鹿野郎

ネロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸せ者の大馬鹿野郎

【Ｎコード】
Ｎ０４２２Ｈ

【作者名】
ネロ

【あらすじ】
１０年後のリボツナ←ジオの死ネタです。リボーンが死んだあと、ツナがした決断とは……？

（前書き）

腐向けです。
ＢＬです。
それでも構わない方だけどうぞ

1ヶ月経った今でも、あの日のことは忘れられない。忘れるなんてできない。

「リボーン！！」

俺を庇って頭から血を流すお前は、それでも尚、俺に「逃げろ」と言う。「お前だけは生きろ」と。

でも、でもねリボーン。お前がいない世界に生きていても俺にとっては全てが意味のない存在でしかないんだよ。

「そっちに逝っちゃダメなの？」

ねえ、リボーン――、とつぶやいた俺の後ろで足音がした。

「デーチモ、」

「……」

俺は振り返る。

「デーチモ、私では、いけないか？私ではお前のその悲しみを癒すことはできないのか？」

「っ、プリーモ……」

「なぁデーチモ綱吉、私ではお前の――…

…恋人には、なれないのか？」

「すみません。俺は貴方の気持ちを知っています。認められない、報われない気持ちのつらさ、よく分かります。でも、俺が今此処で貴方を選んでも、それは貴方を見てのことじゃない。顔も性格も、何一つにてもいないあいつ――リボーンに重ねてしまうから」

「それでもいい！！あのアルコバレーノの代わりでも何でもいいんだ！お前の傍にいられるなら……」
「…ダメなんです！それでも、それでも！リボーンの代わりは何処にもいないから…俺が、俺の醜い心が、貴方を、貴方のその純粋な想いを否定して、ずたずたに傷付けて、捨ててしまうから……」
「使い捨ての玩具でもいい。…本当に…、なんでもいいんだ……！！」
俺はくすりと笑った。彼はそんな俺に少し驚いた様だった。
「でも、そんな酷いことを自分のご先祖様にしたらリボーンに怒られちゃいますから」
今度は彼がくすりと笑う番だった。
「お前は…、本当にあのアルコバレーノがすきなのだな」
「ええ、すみません、プリーモ。――…俺、行きますね」
「…死にに、行くのか……？」
「ええ、此処に生きてても俺にとっては全てが無意味で無機質なものでしかありませんから……」
「…そうか」
俺は、彼――ジオに背を向けた。だって、貴方に涙を見せたくないから。こんな俺を純粋に想ってくれているジオを突き放した意味が無くなるから。
――ごめんなさい、ジオ。
“プリーモ”なんて、他人行儀で。
でも、貴方もいけないんだよ？デーチモなんて言うから。…俺はまた、貴方のその優しさに甘えてしまった。
「逝ってきます、ジオ」
俺は呟いた。
「だって俺にはリボーンしかいないから」
――――――――――――――――――――――――――――――――

「――…初めまして、ボンゴレデーチモ」
「初めまして、白蘭」
俺は、俯いてくすりと笑う。
「…で？俺に――、何を交渉しに来たんだっけ？」
にこやかに笑う白蘭。…分かってるくせに。
「…ボンゴレ狩りをやめろ。それだけだ」
「へえ、そう……」
白蘭が指を鳴らすと同時に銃声と頭に焼けるような痛み。
「ごめん、全くやめる気ないんだよね、…って、もう死んじゃってる？呆気なかったねえ、綱吉クン？……ねえ、早く“これ”、片付けてくれない？俺の部屋が血まみれなんだけど、」

――――――――――――――――――――――――――――――――

…此処は――、何処だ？
「…リボーン――…」
俺の目の前には、俯いているリボーンがいる。
「…馬鹿野郎が、」
「うん、そうだね」
くすりと俺は笑って、でもねと続ける。リボーンがいないところに生きてても、時間が無駄に過ぎ行くしかなかったんだよと。
「…プリーモは…何て言ってた？」
「俺の中でのジオの最後の言葉は『死にに行くのか』…かな」
「お前、それに何て答えたんだよ」
「『此処に生きてても俺にとっては全てが無意味で無機質なものでしかない』、って…」
「最悪だな、お前。…最低最悪の大馬鹿野郎だ」
「何とでも言ってよ、これからはずっと一緒なんだから」

「そうだな、幾らでも言ってやるよ。この大馬鹿野郎」
「でも、最強の家庭教師様はそんな最低最悪の大馬鹿野郎に甘いｋら、赦してくれるんでしょ？」
「…馬鹿野郎、――愛してっぞ、ツナ」
「うん、愛してる。リボーン…」

何だかんだでいつも俺の罪を赦してくれる、そんな君に出会えた、
そんな君に恋することができた、そんな俺は、

幸せ者の大馬鹿野郎

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0422h/

幸せ者の大馬鹿野郎

2010年11月23日05時58分発行